

9日 木曜

サムエル I



20:24 ダビデは野に隠れた。新月祭になって、王は食事の席に着いた。

20:25 王は、いつものように自分の席、つまり壁寄りの席に着いた。ヨナタンはその向かい側、アブネルはサウルの横の席に着いたが、ダビデの席は空いていた。

20:26 しかし、その日、サウルは何も言わなかった。「思わぬことが起こって身を汚したのだろう。きっと汚れているためだろう」と思ったからであった。

20:27 しかし、その翌日、新月祭の二日目にも、ダビデの席は空いていた。サウルは息子のヨナタンに言った。「どうしてエッサイの子は、昨日も今日も食事に来なかったのか。」

20:28 ヨナタンはサウルに答えた。「ベツレヘムへ行かせてくれと、ダビデが私にしきりに頼みまして。

20:29 『どうか、私を行かせてください。氏族の祝宴がその町であります。長兄が命じているのです。今、あなたのご好意を得ているなら、どうか私を行かせて、兄弟たちに会わせてください』と言ったのです。それで彼は王の食卓に来ていないのです。」

20:30 サウルはヨナタンに怒りを燃やして言った。「この邪悪な気まぐれ女の息子め。おまえがエッサイの子に肩入れし、自分を辱め、母親の裸の恥をさらしているのを、この私が知らないとも思っているのか。」

20:31 エッサイの子がこの地上に生きているかぎり、おまえも、おまえの王位も確立されないのだ。今、人を遣わして、あれを私のところに連れて来い。あれは死に値する。」

20:32 ヨナタンは父サウルに答えて言った。「なぜ、彼は殺されなければならないのですか。何をしたというのですか。」

20:33 すると、サウルは槍をヨナタンに投げつけて打ち殺そうとした。それでヨナタンは、父がダビデを殺そうと決心しているのを知った。

20:34 ヨナタンは怒りに燃えて食卓から立ち上がり、新月祭の二日目には食事をとらなかった。父がダビデを侮辱したので、ダビデのために悲しんだからである。

人の願いと基準によって王になったサウルと、神様に選ばれたダビデの違いがここでも明かになります。サウルに関してはまさに反面教師ですが、誰もが人である限りは同じような面を持ち合わせていると気づく必要があります。

サウルは自分の王位を息子であるヨナタンに継がせたいと願っていました。それにはダビデがいたらヨナタンの「王位も危うくなるのだ。」ということです。自分では息子のためと思い、そのように言っているのですが、まったく身勝手な思いであることは、その息子までも怒りで殺しそうになったことで分ります。

子どもは次世代のためといいながら、実は身勝手な考えであるという可能性もありますから、気をつけなければなりません。

またサウルは主の前にも身勝手です。王位は自分のものではなく、主のものなのにそれが分っていません。それを守ろうとダビデを排除するたびに罪を犯し、結局王にふさわしくない自分であることを露呈しています。

王ほどではないとしても、主に用いられている人は、また主から善きものを与えられている人は、それが主からのものであることを肝に銘じ、主に感謝して謙遜に従っていきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

